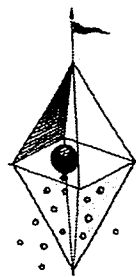


仏教の平和思想

中村 元



1

現在の世界では平和が特に重要であり、皆等しく平和を願っている。この平和という言葉は西洋のピースという言葉葉を移したのであるが、インドではシャーンティ (Santi) という。漢訳仏典では寂静と漢訳される。つまり静けさを意味する。ピースはラテン語のパークスに由来し、英語文献によれば、会場がざわついているようなときに「静かに！ 静かに！」と言うのに「ピース！ ピース！」と言う。やはり静かなことを意味し、インドのシャーンティと

符合しているのである。タゴールが建てた大学がカルカタの北の方にあるが、(santi-niketan 静かな住い)と名付けられ、自然に恵まれた処に在る静かなたたずまいの建物だ。

シャーンティはサンスクリット語のシャム (sam 静まる) から作られ、ウパニシャッドの中にこのシャムが出てくる。インドの僧・スワミは瞑想の前、あるいは後に、シャーンティという語を三回唱えて心を静かならしめるのである。

実際に世の中に平和を実現するためには、様々な事柄を

考慮しなければならないが、根底においては心の平和がなければならぬ。仏教は心の平和を実現することを目指し、精神統一としてのディヤーナ (dhyana 思ふこと、瞑想すること) を説いたのも心を静かならしめるためだったのである。

ディヤーナを漢訳仏典では「禪」という言葉に移している。今日では、禪問答とは訳の分らないことや人の意表を突くようなことを言うことだとされているが、それは末流における変化であって、元々は静かに瞑想して心を静かならしめるというのがその目標である。

心を静かにして人々と付き合うのが仏教の行動倫理の基本であり、人とお互いに話し合って解決のつくことは、自ら道理が明らかになって、解決の道が得られるようになることを目指した。しかし、事柄によってはいくら論議しても解決できないことがあり、その様なことを論議しても無駄であるということを最初期の仏教は言った。例えば、世界は有限か無限か、世界は永遠に続くか消滅するか、靈魂と身体は同一のものか別のものか、修行を完成した人は死後も生存するのかしないのか、というような問題を論議し

ても無意味であるとしたのである。これらは現在でも、問うたところで結論は得られないことだが、仏典では、結論を聞かれた釈尊は返事をしないで捨てて置く、すなわち捨置記 (捨置記答) という一つの「答え」を与えている。

捨置記とはイエスでもノーでもない解答の仕方であり、西洋人には理解しがたい事柄である。もともと、ワレンというアメリカの学者は「ハーバード・オリエンタルシリーズ」で仏典を翻訳して、この問題に触れ、西洋人に全然理解できないことではないと言っている。例えば「君は君の母を殴るのをやめたかね」と聞かれたときに、聞かれた人は「なんだ無礼な奴！」と思って返事をしないであらう、という例によって、捨置記が理解可能だと書いているのである。

捨置記の言わんとするところは、形而上学的事柄について論議することは無意味だということであり、仏典では毒矢の譬によってその無意味さを示している。矢に当たって倒れている人に向かって、あなたに矢を射た人はどんな人であったか。バラモンであったか、王族であったか、庶民であったか、奴隷であったか。その人の色は黒かったか、

白かったか、背は高かったか低かったか、というようなことを聞いて詮索している間に、毒が回って死んでしまうであろう。まず成すべきことは矢を抜いて治療することだ、という。解決不可能なこと、あるいは思考能力を超えたことを論議すべきではなく、いま生きている我々がいかに生きるべきであるかを明らかにするのが本当の道であると考えられた。

2

では、人と人とお互いに関連を保ちながら生きていく場合に、最も大切なものは、その様な形而上学的な事柄ではなく、何なのか。仏教では慈悲こそ、その大切なものであるとしているのである。人と人とは明らかに別の人格として対立しているが、しかし、目に見えないところで縁があつて繋がり、因果の連鎖が互いの間に働いている。だから、その縁や因果の連鎖という点から見るとすれば、他の人は決して自分と違つた対立する存在ではない。思いやりの対象となりうる存在であり、相手の身になって考えるのが慈悲の精神なのである。

慈悲の精神の実現は宗教的に非常に難しく、容易に実践に移せない精神と思われるかもしれないが、立派な宗教家のみではなく、いかなる人にも日常生活の中で実現されているのである。慈悲とは報いを求めない愛であり、子に対する親の愛、あるいはそれほどなくても、困っている人を助ける行為、例えば、行く道を問われて教えるといった報酬を求めない行為に生きている。

慈悲を妨げるのが悪である。中でも、仏典に説かれている五戒の最初に不殺生戒があるように、生きているものにとつて一番大切な命を奪うことが最大の悪なのである。仏教の歴史をみると、人間の命を奪うのが最も良くなく、また、できれば人間に近いものも殺さないことを目指している。

砂漠の宗教とでも言うべき西アジアから西の方の宗教は、かつてはどこまでも人間中心であつたが、それも、文明が進歩して物質的にも精神的にもゆとりが持てるようになった結果、鳥や獣をもいたわることを説くようになった。西洋では、古代や中世には動物愛護という考えはなく、近世になつてからのものである。例えば、聖者が鳥に説教し

たという話もあるが、そういう聖者の弟子が教会の豚を叩き切つて、その肉を持ってきて病人に与えても聖者は別に叱りはしなかった。ただ教会のものを勝手に破壊したのがいけないと言うのみだつたそう。だが東洋では、元々静かに思いやるという気持ち支配していたからであろうか、仏教にしろ、ジャイナ教や道教にしろ、生き物を殺さないようにと教えていた。まして人間同士が殺し合いをするなどということとはとんでもないことなのである。

ところが人類の歴史上、戦争は絶えず、今では人類はあらゆる生き物が存在し得なくなるかもしれない状況にある。このことは決して杞憂ではないと思う。かつて生存していた恐竜は、他のいかなる生物も食い殺したが、その特有の武器たる強い破壊の能力が自らを破壊して、死滅したとも言われている。これを今に当てはめるなら、人間はその優れた知能によつて素晴らしい文明を作り上げたものの、まさにその能力のゆえに奢り高ぶつて、人類の消滅も有り得ないことではなくなつてしまつてゐる。これほどの破壊の武器が発達したために、地球上には安全な土地はなくなつてゐる事態を根本的に考えてみるべきだ。

そこで、釈尊の説かれた教えをもう一度考え直す必要があるのではないかと思う。殊に仏教こそ平和を語る場合に一番資格のある宗教だからである。つまり、他の宗教は、多かれ少なかれ、暴力、武力と結び付いて広まつたが、暴力や武力によつてではなく、説得のみによつて広がった宗教は仏教だけなのである。ただ、不殺生を仏教以上に徹底して説いた宗教にジャイナ教があるが、これはインド以外の地に広がらなかった。

絶大の学識を持つ民間の学者であつた南方熊楠は、生き物を殺さないから、ジャイナ教は世界にたくさんある宗教の中で一番高級な宗教であると言っている。その意味を現代的に解釈すれば、平和を特に目指し、実践しようとする宗教、ということになる。しかし、ジャイナ教は理想を追求したのはいいが、それが極端だつたために様々な問題が生じた。

ジャイナ教の僧は歩行時に靴も下駄もはかない。なぜなら、はくと虫を殺すかもしれないからである。また、マスクをいつもしている。口を開けていると虫が飛び込んできて、その虫を噛めば殺生の罪を犯すからである。暗くなつ

てからは食べ物を食べなくてはならないという戒律があり、俗人もこれを守っている。それは必ずしも衛生上からの理由によるものではなくて、暗くなってから食べていると、食べ物の上に虫がきて止まっているのを、知らずに嚙んでしまうからである。あるいは、水漉しの器を持っていて谷川の水を漉して飲む。これも、衛生的な理由である以上に、漉さずに飲むと水の中に生きている虫を飲み込んで、殺生の罪を犯すからだ、というのである。

こうした在り方を徹底すれば、乗り物にも乗らないという極端なことになる。乗り物の車輪で虫を殺してしまうのを恐れるからである。しかもこれが拡大解釈されて、エレベーターにも乗ってはいけない、ということになる。ボンベイあたりには金持ちのジャイナ教の信者がいて、二十階ぐらいのビルディングを建てて、最も良い最上階に僧や尼を宿泊させるのだが、エレベーターに乗れないので歩いて上がった下がり下がりしている。更に飛行機にも船にも乗ってはいけないということになり、布教ができなくなってしまう。

ジャイナ教の行者にも階級があつて、白い衣を纏ったヤ

ティという階級は飛行機や船に乗っても良いが、サードフという上の階級は飛行機にも船にも乗らないために、結局布教ができない。また、薄い着物を着ているが、それでは例えば日本の冬をとて暮らせない。

3

仏教は適応性を持っているので世界宗教になった。しかも、どここの国に広まったにしても「剣かコーランか」というやり方によったことは一度もなく、したがって仏教による戦争というものはなかったのである。我が国で法華一揆や一向一揆があつたと言われるかもしれないが、それらの一揆は封建領主の弾圧に対する民衆の反抗であつて、その弾圧が止めば民衆の反抗も止んでいる。

島原の乱にしても、原城に閉じこもつた二万数千人の大部分はキリシタンだったが、ジェンチオ、英語ではジェンタイルすなわち異教徒と呼ばれる人々もいて、キリシタンでなくても一緒に戦つたのである。つまり、島原の乱は宗教戦争ではなく、封建領主への反抗であつたとも言える。

日本でも種々の戦争があつたが、戦いが終わった後には敵味方の冥福を祈り、菩提を弔っている。これを「怨親平等」という。怨は敵、親は味方を指すが、死んでしまえば敵も味方も平等であり、恨みもなくなつて回向するという我が国特有の伝統だと言つてよい。この怨親平等の顯著な例として、鎌倉時代に元軍が攻めてきた後、北條政権は自分の側の将兵のみではなく、死んだ元軍の将兵の冥福も祈っている。島原の乱の場合も、徳川幕府は非常に残酷なことを行っているものの、乱後、僧侶を派遣して敵味方の菩提を弔つた。

西洋では例えば十字軍がイスラム軍の軍隊や民衆と戦つても、その後で敵の菩提を弔うというようなことはしなかったであろう。キリスト教徒ではないイスラム人は地獄へ行く悪魔のようなものであるから、弔わなくても当たり前という考え方なのである。

宗教と戦争は結び付かないものとする考え方は、仏教の広まった日本人の間には古くからあつたのだが、その伝統は明治維新のときに変つたと思う。明治十二年に東京招魂社を改称した靖国神社には官軍の戦没者だけが弔われ、幕

府方は入っていない。その新しい伝統が生まれて、今度の戦争においても日本軍の戦没者だけが弔われている。日本人の間に昔から生きていた怨親平等の思想は、今後もなんらかの形で生かされるべきではないだろうか。

戦争は、大昔は部族と部族とが殺し合いをした。その後、日本の場合で言えば、例えば藩と藩の戦さというような戦争があつた。薩長とか幕府だとかいつて百何十年前までは国の中で戦つていたのである。今日では、地球が一つの生活範囲になりつつあり、その中に国家が存在している。その国家が権力を持ち、武器を生産、購入して殺し合いをする世界になっている。このような情勢になると、国家の問題について仏教はどう考えていたかを述べなければならぬ。

原始仏教聖典、パーリ語聖典それに漢訳仏典にも、国王とは元々人民が選出したもの、と明確に出ており、国家契約説あるいは社会契約説という立場をとっている。人間は利己的で互いに争う傾向があるから、自然状態のままに放置しておいては各人の安全が保たれない。生活の安全を図るために、人民の中から一人の代表を選んで、その代表に

人民各自の権利を譲り渡した。国王とか王族、クシャトリアは元来、衆議によつて推挙された人なのである。人間世界が成立した後、人民の間で侵略や盗みが起こったが、それを防ぐために、人民達は集まって審かに議し、衆のうちの一人の有徳の人を選び出して、收穫の六分の一を差し出して主とした。その子孫が国王となったのである。法典でも六分の一となっているが、六分の一は非常に低い税率で、このことは、インドでは王権が弱かったことを意味している。『マハーバータ』という叙事詩の中でも、同じような伝説があるが、ただ違うところは、王を作るのに、神々が相い計つて一人の王を任命したとなっていることだ。

人民が選出したのであるから、漢訳仏典ではその選出された人に「民主」という言葉を当てている。故に、国王は特別な人ではなく、皆が選んだ人であり、皆の利益を守つてくれなければいけない人であった。人民が王を選出して国家が始まったというのである。

このような国家契約説は日本でも古い時代に既に知られていて、北畠親房の『神皇正統記』の一番最初のところに、

国家が相互に闘争に熱中していたために、民衆の平和な生活が侵害されていた。それを釈尊は嘆き、世の人は富を追求し、国王は国土の拡張を欲する。国王は武力をもって大地を征服し、海辺に到るまでの地域を占有し、海の此方では満足せず、海の彼方までも求めるであらう。これが国王の姿である、と言っている。これは、お釈迦様のときのことだけではなく、今のことも言っているのではないだろうか。若干の強国が示している無理押しの態度がそうであらう。

国王は権力と富を求め、その欲望の故に戦争を始めて民衆に最悪の損害を及ぼす。また強大な権力をもつて恣意的に人民を圧迫して苦しめる。この点で国王というのは盗賊と区別のないものだという。

仏典に人間の受ける災害がいろいろ出ているが、それらの難の最後の方に、国王の難と盗賊の難と二つ挙げられている。つまり、国王と盗賊とどこが違うのか、一方は合法的に民衆を苦しめ、一方は非合法的に苦しめるだけではないか、というのである。仏典では人民は哀れなものだと嘆いている。人々は王の官吏を恐れて、昼は家に住むことが

仏典を紹介する形で出ている。ただしそれは天竺の説であつて我が朝は異なると言い「天祖より以来繼續たがわずして、ただ一種まします」と、ただ一つの系統が続いていると書いている。平田篤胤もこの国家起源説を引用して「これは天竺において酋長の始まりをいう」と書いている。このインドの国家観は、ホップスやロック、ルソーなどの社会契約説と多分に通ずるものがあると言つてよい。

国王は人民が雇っているものだから、安全請負業者のようなものである。そこで『カウティリヤ実利論』に次のように書いている。人民が盗賊に奪われたものを発見し得ないときには王の責任となつて、王自身の物からこれを与えるべきである。もしもその奪われた物を取り戻すことができなければ、自ら獲得したものを戻して与えるか、あるいはそれを売却して与うべきである、と。ジャイナ教にも似たような伝説がある。

4

本来、国王とか国家とかは以上のような存在であるべきなのだが、現実の国家はそうではなかった。当時、諸々の

できないで、家をトゲのある枝で囲み、太陽が昇ると共に森へ入っていく。昼は王の官吏が荒らし、夜は盗賊が荒らす。夜は盗賊が食い荒らし、昼は徴税官が食い荒らす、と嘆いている。

国王と盗賊を区別しないことはインド人の生活を見るとよく理解できる。近年、私がインドへ行つたときのことだが、ガンジス川に橋が掛かった。その祝典の際、州知事は祝辞で「ガンジス川に橋が掛かったのはいいことだ。これで警察軍の移動が自由にできるようになつて、彼方に住んでいるマンシングという盗賊の親分を討伐することが容易になるだろう」と述べていた。盗賊の親分がいる所は分かっているのだが、捕まらない。なぜかと言えば、警察軍が最新の火器を持つて討伐に行くのだが、民衆が盗賊の親分の側について情報が洩れ、逃げてしまうからである。民衆に言わせれば、警察軍は威張っているだけだが、親分は困っている人間に気前よく物や金を撒いてくれる。その親分は金持ちの蔵を襲いはするが貧乏人を襲うことはない。然も親分は敬虔なヒンズー教の信者であり、毎朝お勤めをしているが、警察軍の方は西洋かぶれしてどこか民衆か

ら離れているところがある。それでなかなか捕まらない。結局、四年間も射ち合いをして、親分は最後に弾が当たって死んだと新聞に出ていた。

盗賊の親分を民衆はラージャ、ラージャすなわち王様、王様と呼んでいる。だから、親分がもつと勢力を伸ばして、大きな都会を占領すると、途端に名実ともに王様になってしまうのである。このような王権の成立状況は、やはりインドでは王権が弱かったことを意味していて、日本の王権の在り方とは大分違っている。日本では大昔から王権が強く、民衆に大きな力を及ぼしていた。しかも、そのような王権が存在する一方、仏教が盛んであった時代には極めて平和でもあった。

平安時代というのは、まさしく平安の世の中だったのである。平安時代四百年の間に死刑は一度も行われなかったと言われており、これは人類の歴史上にないことであった。果たしてそれが事実かどうか、法制史、日本史の専門家に確かめると、本当であるという。強盗が捕まって皆で蹴ったり殴ったりして殺してしまうということはあったそうだが、それはリンチであって、法廷での裁判の結果、死刑を

宣告したということは一度もない。最高刑は遠島、つまり島流しであり、死刑になるはずの場合も、罪一等減じるということにしていたという。これはやはり平安時代に仏教の感化が行政司法の面まで及んでいたことを意味している。

この「平安」が破れたのは保元の乱の時であり、世は武家の時代となり、やがて戦国時代となっていった。だが、仏教の感化の力は消えてはいず、徳川時代にしても、階級制度があったりしたが、日本の中で戦争はなかった。一方、西洋ではこの時代、文明は進歩していたものの、戦争は絶え間がなかった。殊に宗教に基く戦争はひどかったと言える。

5

今日、国家がなければ人々は生活できないと考えられており、高度に発達した文明社会においては、治安の維持とか技術の開発、社会福祉施設の設定など、国家の力を必要としている。しかし、それらが全て必要かどうかは考えていいことではないかと思う。今までは「お上」のすること

は誰も反抗しないし批判もしなかった。例えば税金を取り立てて福祉施設を作ることに對して誰も異議を唱えない。だが、政府が運営している福祉施設よりも民間の宗教団体の施設の方が心からの奉仕をしてくれるということを私は聞く。

戦前には、国のためにという気持ちが高らかに強かったから、官の立場にある人がよく勤めた。ところが今日では、もう国のためにという意識がなくなつたので、本気で自ら行動するのは宗教的奉仕の精神を持ったような人であり、そのような人達が携る病院や福祉施設は立派に運営される。しかし、官が行うと、お役所仕事になり、おざなりになるという恐れがある。

教育にしても、税金で建てられた公立学校はたくさんあるが、今では、実際に学力をつけてくれるのは塾だというようなことになっている。子供達は学校へ行くことを嫌がつて塾へ行くという現象が見られるようになった。私立の塾が教育を行っていると言われている。大学も文部省の助成金をもらう代わりに、国家の強い統制を受けていて、うまく運営できない面がある。私は、大学を全て民営にし

てお互いに競い合うようにすればいいのではないかと思っている。

かつて、郵便局とか鉄道も能率的に動いていたのだが、今日では、郵便局へ行っても何かと面倒であり、宅配便の方がよほど便利だということになってきた。鉄道にしても、戦前は、鉄道に勤める人は誇りを持っていた。人々も日本の鉄道は大したものだと尊敬していたものだが、戦後それは駄目になり、結局は分割民営になってしまった。いずれにせよ、国家統制の意義をこの機会に考え直して見る必要があるのではないだろうか、同時に、権力による支配は悪であるということを西洋では無政府主義者などが言ったのだが、仏教では最初からその思想が表明されて、後世まで残っているのであるから、この権力支配の悪についても仏教の立場から考え直してみるべきだと思う。

権力による支配に対して仏教徒がどのような態度を取っていたのかについて少し触れるが、次のような文句がある。「王位にある王族というのはまるで蛇のようなものである。彼等が怒ったときには人民に罰を加えることがある。故に彼等を怒らせぬようにして、おのが生命を守れかし」。

めいめい自分の命は自分で守れというのである。そこで原始仏教の人々は世俗の権勢や闘争などから遠ざかって、自分達だけで理想的な集いを作ろうとした。それがサンガであり、経済的には組合、政治的には共和国という仕方を仏教教団に取り入れたのである。

ただし、そのサンガを構成していたのは出家者が中心であり、その出家者の感化のもとに世俗の人々も自ら精神的に高められて、平和な世の中を作ろうというのが仏教徒の理想であった。その教団に属する人々は、自分達の生活を清らかにして、心を清めることを目標にしていたので、例えば「軍隊を見てはいけない」というような戒律があった。今日で言えば、テレビで軍隊のパレードを放映しているのも見てはいけないということになるが、それほど徹底した在り方であった。

ただそれは出家者の場合であって、在家者の場合には、自ら平和の気持ちを生活に実現せよということに力が置かれていた。戒律としては五戒が説かれ、殊に第一の不殺生戒の点で仏教の感化は非常に広まったと思う。他の戒律は、盗むなかれ、偽りを語るなかれ、邪淫を行うなかれである。

と争いを起こしてはならない、と言っている。

では、他の国々と争いを起こさないようにしていても、争いが起きてしまったらどうすればいいのか。これは非常に現実的な問題だが、大乘仏典では、どうしても戦わなければならぬ事態になれば、まず戦わないで相手を撃退する方法を考えよ、と説く。例えば、こちらの武力は強い、と虚勢を張って向こうに恐れを抱かせる。それでも向こうが退かずに戦争になってしまうこともあるが、その場合にはできるだけ死者の数を少なくするように、といったことまで出ているのである。

仏教は大宗教であり、長い歴史を有しているので、いろいろな問題がその途上にあった。そのために、仏典にそうした現実問題への対処の方法が説かれているのだが、仏教の平和の理想をアショーク王が実現している。アショーク王は祖父以来の大帝国を受けて、帝国を拡張したが、東インドのカリンガ国を征服したときにたくさんの死傷者を出してしまった。王はそのことに悔恨の情を生じて、仏教に帰依する念を固め、平和の宗教としての仏教を世に広めようと思ったのである。

これらも結局は人に害を及ぼさない、人を傷つけないというもので、不殺生戒と趣意は同じであった。

五番目は不飲酒戒。これは後から付け加わった戒律であり、前の三つの戒律と重みが違うのではないかと、教義学者の間で論議された。確かに前の四つの戒律はそれ自身が悪いことを諫めている。一方、酒を飲むことは悪いこととは言えない。ただ、飲み過ぎることがあるから「まあ待て」とさえぎるのであって、性格の異なる戒律と言える。しかし、やはり、その不飲酒戒も、仏教では自他一体を強調するので、他人のみならず、自分にも害を及ぼさないということを書いていくことになる。他の四つと共通していて、平和な世の中を作るということを目指していたのである。

6

国と国との戦争に関しては一般の民衆は受け身の立場であるから、戒律としては特に説かれていない。しかし、国王に対する教えが仏典の中で種々説かれている。馬鳴、竜樹といった人が書簡の形で若干の政治論を残しており、人民をいたわれ、人民の生活が楽になるようにせよ、他の国々

仏法の法は人間の理法であり、ダルマと呼んでいるが、その法を世界に広めるためにアショーク王は西の方のギリシャ人の五つの国に使者を送って自分の理想を伝えようとした。また、スリランカとかビルマといった方面もアショーク王のときから仏教が広まるようになったのである。

仏教に帰依したアショーク王は、戦争を一切行わず、仏法を戴いて世の人々が平和に安楽に暮らせるように、動物も殺さないということを実行した。あるいは、西紀前三世紀頃、病氣や貧乏で悩んでいる人々を助けるための施設も造っている。これは、西洋で病院のような施設ができるよりも七、八百年早かった。西洋人の学者ヴィンセント・スミスなどがはつきり言っているが、西洋でこうした福祉施設が造られたのは西暦五世紀頃のことであり、アショーク王の高い理想に打たれるのである。

日本では、やはり仏教に帰依した聖徳太子がアショーク王に比べられるような様々な仕事をし、カンボジアでは仏教が広まっていた十三世紀頃にジャヤバルマン七世が国に病院を百一造ったことを誇って、碑文にそのことを記している。

しかし、こういった理想というものは、後の人々がそれを受け継いで発展させなければ死滅してしまう。カンボジアではこの間の内戦で非常に残酷な行爲が行われている。伝統は、ただ後の人がその精神を体得することによってのみ生きるものである。

これは日本人についても言えることであろう。平安時代に人々が持っていた理想がどれだけ生かされてきたであろうか。このことについては、私達日本人として反省すべきだと思う。過去において、いろいろな国々で理想を戴いて平和を実現しようという人が幾人も現れたが、それらの理想の精神を、今度は、一つになりつつある我々の地球の上で具現することが、現代における最も緊急な課題ではないだろうか。その意味で、仏典の言葉というものは、我々に教えるところが極めて大きいと言えるのである。

(なかむらはじめ・東京大学名誉教授)

〔巻末に英訳掲載〕